雲い浅黄とそめにけりきへにけりさて人かげのなきとしらねばま
ろしのかげに椿のちりしはの川にながれてうせにけり

鶏合

心も言葉もかよはれすけふを祝ひの鳥あいせ宗盛公の御前にかざりすへたる鳥のかづ一〳〵次第に坐をかまい威儀をたゝしてかしこまるまづ一番のとりだすき結ぶいもせの衣〳〵をけふ吹かへす松風と名にあふ鳥のこゑきけば峯にかよふか琴のねにつめをかくしてしこやかに第二番の勝鳥い名も立波と札つけてすゝむい鳥のくせにこそよせくる波よ砕かるゝ磯のたて石さら〳〵とひく沙させば後の波うけてはづむい小蛟のかしら〳〵を打あけて拍子もそろふ足どりいたつなみとこそ名づけたり源氏の鳥いしら地より染ぬをなんとも申ひかのこ妹脊といふい義仲のちぎりたがへぬつま鳥の雍と〳〵い中ごとのかはいわふても見ぬ貌にくやわふて別るゝ鳥のこゑ別れてあふて合せ鳥すへい白糸いとかけて車に袖をくりかへすしめつ申るめつ後から引よせて申ふかからこわげむすぶのためと坐あつけばけふの行司の朝況か源氏の鳥にかざしたる團扇かがげのおろ〳〵とおろを大事にゝなる言葉ながら御前にてのゝる角力のむすびにい關と關とのゝちまけに弓矢の名るしとり〳〵に鳥もなくとやゝけひさいうちはの風にまゝをなるすわわす相手い申やゝ御前平家の幕のきぬ〳〵に朝日いろどる鳥のさま赤き團扇にさしそへて水かひながら申うゝと相手はしげにまぬゝれて十二〻め手くたりを合せて四十八手とい十二因縁十二月睦月よりまつ明

そめて東のそらときく時ハ塒をおりて羽たゝきの鳥の足あと文字
つくる砂にいろはハ八文字そりにそり橋したぐいのたがいにすく
うたゞむそうあげておとそハ腹やぐらとさゞのうごきさかげにて
ふりはどき〳〵鳥毛〳〵のさゝ波ハ錦の糸よ針そへてぬひならべ
たるごとくなりいざと手合の聲かけてくるりくる〳〵くるり〳〵
とつけまハす東ハたつ波西ハくれないくゞる大ごしにかけて櫂の
衆汐のもび平家の鳥の染色ハ勝いろ見せて白とりハ勝どきあぐる
ときのこゑこれも軍の手はじめと片唾をのんで二番とり三番がち
ハ源氏のいさみ朝な〳〵の朝かはが曾釋ハ袖につゝむらん又もや
合す羽根と羽ねはねてはつしと妻とりを距にかけてとさからへて
うと蹴あげてまたしづむ源氏のとりハいきはひよく西のかたへか
た野のきゞす逃れぬ所とおしよせて飛ちがひかけ違ひまけじ〳〵
と距をたてひねんのはしゞみがた〳〵〳〵身ぶるひとび鳴おかた
げもこれぞたがひの貫つゞみかい鐘よりも拍子よく聲かけ喰あふ
羽のおとばつとちり〳〵ちるさくら紅梅よりハいさましき

小町少將道行

懸せずハ玉の盃そてとなく物のあわれハよもしらじいたわしや
少將ハ小町が前をおいまいらせいつくとさして去ら玉かなにぞと
人の問んにハ露とこたへて消なまじあハれ二人りが中〳〵にいつ
下紐をうちとけて木賊いろなる狩衣にむらさき匂ふ藤ばかましは
るゝ裾をかひとりてかひ〳〵去げに見もれどもむだらからたちた
き竹や路の小石にあしいたみ裾のむらさき引かへて緋のはかまか

どうたがヨれいとゝ臘夜にふるゝ村雨かおつるゝなみだかと袖う
ち拂ひふたぢりふとまよゝる〳〵戀路のならひぞあれなる　詞「姫
君なみだもろともにげにかつならぬわれもへにかくまでお身を苦
しむるもつたいなやとのたまへば少將かほをふりわげて君もへな
らば此命なにがおしまんおしとりのつがひならべんおふせにゝ此
年月の胸のやみ今宵はれもくあまの川渡うくらべて七夕の年に一
ト夜の思ひをしらば今の二人りがもくすへを守る誓の神がきやあ
れゝ消燈のひゝりぞとたづねめぐればさもわらぬ狐火の後になり
つゝ先にきへちより〳〵ちらめくゝわれを追手人の來るゝとゝく
れたよらんゝしにも身をおのゝきてゝくがさゝくれ家とてもあ
らしふく心も足も冷わたり之ん氣もつゝれはてければ去ん〳〵と
ものすごくなきたまおくる仇し野の松の木かげに立よりてしばら
くつかれをはらさるゝ

あづま　根曳の門松
興兵衛

あづまうけむせ山崎與次兵衛受だせ〳〵山崎與次兵衛いつか思ひ
のナ下紐とけて昔思ひばうやつらや忍ぶ昔もうやつらや　詞「情な
や誰あろふ山崎與次兵衛さまとて人に後れぬみだれがみあづまが
貌も見忘れてうつゝなやとせいすれば彼方ゝ藤屋のあづまか「チ
ゝ嬉しやなアレわれを見や歩さへもつがひはなれぬ上羽のてうヒ
れ〳〵とても二人りづれ粹たぢうしの中〳〵に春にもそだち花さ
そふ菜種ゝ蝶の花しらずてふいなだねの眛しらずしられぬ
中なればうかれまいものさりとてゝ狂ふまいものわしさなや親の

でおんをふりせてゝをなたのせゐになりふりも昔にゐにぬ男山
今でゝ人も秋去のや外山の松にことといん我身の末ゝはなれ駒お
のれと狂ふ秋の葉の亂れ心ア、狂ふまい待身になるな親と子の便
りをしのぐ山崎の妻もさこそゝ亂れ髪いふた言葉がちからぞやわ
しがなじみゝ三重の帶長い夜すがら引しめてわつかるものゝ半ぶ
んのぬしゝわすれていさんすか過し月見ゝ井筒やでそこいくまな
き夜とともに飲わかしたる面白さ今の浮身にくらぶれゝいとゝか
前がいとしいと襟につゝみし忍びなきおれもそなたを夢にだにわ
すれぬからに親妻のいさめはとつとなぎさ山松の位にのぼりつめ
冠ゝきねど大臣と花車がとゞろく口舌のもんやり手がたゝき禿が
ねふりみな夢のまのきやうがいと破れぐわちもなかりけりかく

ゝしれども柳の糸のおどろをみだれ山おろし身にしみ〳〵といさ
めの言葉ヱすれまいぞやわすれじとたがいに手ヨ手をとりかゝし
涙くもるや霞の玉夕陽雲にはどもなくめぐりくる〳〵〳〵と月ゝ
もけどもはてしなき思ひゝ目前親のばちわたつてくだくる男氣の
おのが姿をヱがおくる走れべはしるあれ〳〵〳〵とまれべとまる
亂れ心やふた思ひ命つれなき流れの身ながれ渡りの世の中に去ば
しとゞまる賤が家の軒にたゝずみいたりけり

墨繪の鳥蘆江のしま

浮島や弁財天女かうりんしみめうのいりさいやましのわけて中に
も糸竹の道を守りの去るしとて磯うつ波ゝ青海波松ふく風ゝおの
づから萬歳樂をしらべつゝげにありがたき三ツの宮風色たぐひあ

ちがねの土のとの巳の年とかへりまふしのいとまなくまな板石の名にめでゝ一すとおさへたさかづきのひらひ上戸の酒むかひなく鶴がさきながむれゞすがたゝ見せずほとゝぎすおもわせぶりいたれやらが懸の心をうつせ貝わしゝひめがいふり袖貝のまたな心ではづかしらしい梅の花がい酢がいのすいな殿のご思ふていつわすれがいすへゝ鮑と鮑とり貝に多のつ　逢み貝とのかへ事人めみるくい嬉しさにその月日がい指をりて待わかしたる床ぶしようたゝ枕のうたし貝ほんにしんきな　もせ貝立名いとわで屏風石さつとさゝ舟あま小舟わびさの聲のエイサッサぬらす袂が浦風にすそ吹かへす卯の花のよるべも波の汐路かな「十二の岩や八ッ七ッむつましどしの兒がふち紫内子つれてそこまゝと殘る名所もみやこ連

まことにじもめう長久とおふでの神のおめぐみ拙き筆にそみ名の島のもるがぬ傍代てそひさしけれ

松づくし

まづことしの歳德ゝ北野にあたらせたまふもへ千代の古道跡とめて又あらたたる若松や君にひかれてよろづ代の雪うち拂ひたてまつるそも〳〵此おん神ゝ西海の雲の波岩こす舟に棹さして今の北野におし渡りまだ傍社のなきうちゝおん身をおくに所なく一夜に千本の松うへて落葉りたしさかり枕ふた神ちざらせたまひにしおん嬉しみを世に傳へ女松男松をうへませていろとなさけをいのるよゞ神のめぐみの女夫松初子の松のわか葉よりさしそふ枝の影うつる日の出の松の二タばしら君が代のはじめとかや妹背岡の小

松原月もりてなびかすわさせ波磯なれ松よ宿かりて須磨のうら松風さむし霜いたゝきし老松い枝のかしたき姿にぞ君のよわひやくらぶらん吹なびきたる村松の岸によるてふひめ松い霞の衣かいとりてたてるすがたのしはらしや松の下葉で落合染て懐てねゝして一ッ松へねゝしてだいてゝねゝして一ッ松二タ葉よりしていたいけに松もふじ咲神つ國嶺さとる音のさつ〳〵とふきみだれたる夕あらしかざす袂のすゝしさいいきの松原まさるとも遠つそらなるから松もわが大君にひかれてい常盤の松のいろいなは柾木のかつら枝なしかきりなき世のためしにい兼てぞうへし神垣の松を子の日にたてまつるといしづやかにぞおさめける

常盤津之部

子賀三番叟

さは姫のかさす長閑にあけそめて今朝玄ろ〳〵と不二のかはうつるかゞみの影そへて松と竹とのふたばしら賑い ふはるのおさなど門よやりはごすめる代に風ふくななはふくな金のうちヨでおひだねせうと玄しやるつくや手まりのかぞへ歌一ッといひてさらぎの種まく小田の神まへりふりわけ髪のいたいけにひむく椿白むく梅のつはみのこざくるまくんるくる〳〵めぐる日のはや鳥合せひな遊び妹脊替らぬもろしらがいたゝく軒にあやめふく幟かぶとめいさましくせうぶうちわふなりふりのたけきいなはもいさぎよ

く障もく駒の竹のをゝ鞭をくれない手づなゝいくりりん〳〵すゝ
みよ磯のやたるがり柳の水の影いそぐ手に手をとりてかゝさゝぎ
のあふせをわたす天の川さゝに一ト夜のちらしがきさゝら〳〵さ
ゝらうちわ太鼓のひようしよくみな撫子のてをそろへやさしきこ
ゑのはりつよく

八大傳とやまの段

彌生いさとのひなあそび女夫ならねど今朝ぞつむ名もなつかしき
はゝこ草たがつきそめし三ケの日の餅飯にあらぬひーがたの腰か
け石もはだふれてやゝ蹴りきこけどろもぬきかへねども夏の夜の
たもとすゞしき谷風くしけづらして夕立ひ雨にあらふてはす蜉
のおどろが下になくむしの秋としなとしなれやいろ〳〵にいわな

のもみぢかりはいし錦のとこのりそめの宿としらでや鹿ぞなく
みさわの時雨はれまなきはいそこども岩ら雲のはだにやれたる
ふりそでをゝゝげて室をいでたまひ「手もとやさしくあかて桶み
のりも菊の露しづく流のおとも山びこのそれかあらぬか風ならで
はるかに聞もる笛のねに伏ひめ耳をかたふけたまし　詞「恩ひよら
ざるわの笛のねわらいが山へ入りしよりきのふまでもけふまでも
狩する男薪こるしづもかよわぬ此みやまめづらしいアノねいろ
草かりわらいのまよひ入りしかたゞしい狐狸か山ずみがしやうげ
をなしてみづからが道心をくじかんためかなよゝもせよ心ならざ
るすさみじやナア「と見やりたまへば向ふよりまだふりわけのお
やろ髪年いやら〳〵六ッ七ッなゝめぐりして坂みちを牛にもられ

て來りけりひめ君をばしとよびとゞめ　詞「ノウ〳〵わらゐ人もか
よゐぬ此深山へのぼりしゐ心ゑずそなたゐいづれの里の子ぞきか
まはしやとのたまへゞ　詞「チヽわしゐ牛馬のためにくさゝるもの
でゐないおしせうさまにかゐるゝものけふ此山へくすりとりに登
りました　詞「ムヽくすりをとりにといやるからゐそなたのしせう
ゐかいしやよナしてそのすまひゐ「チヽ此山のふもとよすみ又ゐ
る時ゐ州崎にあり常にゐ人の病をぢし又ゐるときゐ著をとり人の
吉凶かふくをうらなひゐるひゐ雨ごひ日和のかぢゐめつちの間に
ゐるゐりとゐらもるこのしらざる事ゐましまさずといとやさしげ
ゐかたりける　詞「ムヽそんならそなたも病の道ゐきゝつらんみづ
うらゐさいつころより夜に日にまして胸ぐるししだい〳〵に身の

おもるゐいのなる病ぞ治するくすりもゐるならゞおしへてたべと
の玉へゞ「ナヽそれこそはつゐりの去るし又目の下にせいじゐん
とて青きいろの見へたるゐ胎内にこをはらみうみ月も近づきしと
いふに伏ひめ打わらひ　詞「チヽアノ子とした事がさすがゐ年のゐ
かざる去るしわけをはなし聞すべしてなたへてよとまねぎ玉へゞ
嫡げに牛のせよりとびおりてお側ちかくあゐみよる伏ひめ君ゐあ
か桶の菊を一ト去だ手にとり玉へソレ此花はしうゐないかやチヽ
くだされやとゐつれかゝるゐ愛らしく右よ左とたゐふれてゐたひ
玉へゞ手にもちて　詞「これ涉覺せよ此花のたれそだてねど秋ごと
におのれと咲ゐ雨露のめぐみをうけし千代見草よゐひ草ともさま
〳〵にいめう多き黄金草すがたやさしきおとめ草いざ去ら菊の涉

身にも子を宿さねといへがたしいへば伏ひめはゝゑみて　詞「いやとよそれいひが事よ夫とてめなき一人り身にやゝをうむべきやうゝなし　詞「おつとなしといいへがたし親のもるせし八ッぶさの犬ゝすなゝち夫なりといふに伏ひめすがたをあらため　詞「そなたゝそのはじめをしりてその後をしらぬなりみぎやうの功德にて辛に身ゝけがされぬなんぞ非類の八ッぶさにわが身ゝきよしいさぎよし神こそ去らせたまいなんといへば童子ゝ打ゑらひ　詞「ひめこそ一をしりて二をしらぬといふものなりまじゑらぬとてはらまんやつるは千とせにしてまじわらず相見てはらみ子をうめり背しもろこし楚王のきさき常に鐵のはしらをいだくついに鐵がねのまろかせをうめりすなゝちかんせうぞくやくのつるぎこれなり偖な事

をかたるべしおまいゝ當國里見のそく女あくりようつきし八ッぶさに見いれられしも定るいんぐゑ身ゝけがさねど戀したふ一ねんこつてたいないにしせんとやどる子ゝ八ッ子されど身にそふ水晶のじもずの德とはけきやうの功力によつて末ついに里見の家のちうしんと生れかゝるもはうべんりきかまへてうたがいたまふなよさらばやさらばと牛のせにのるよと見へしがきりかすみコレのふまつてと伏ひめがすがるとすればもうらうとすがたゝうせてたちまちにかきけすごとくなりにけりはつとばかりに伏ひめゝ泣くつおれてゐたりしがやう〳〵に貌をあげさてゝ年ごろしんじんなすすさきの行者のかりそめよ童子とあらゝれ伏ひめにいんぐわをさとしつげたまふるさいさりながら情なやわが身をしたふ八ッぶさ

がしらしんの身に宿りくいいたいせしかあさましやとりもな
ほさず畜生道ナウいまわしやコハなにとせんどうせうとわつと計
りにどふとふしりうていこがれ泣たまふやう〳〵になみだをぬぐ
ひ　詞「ア、歎くまいうらむまいとても畜生さんがいの種を宿せし
此身のごうもしも月みち犬のこをうまば此身のはぢ女ながらも
義實が娘にくしと思ふ八ッふさを守りがたなにさし殺しみづうら
とても谷川の水のあいとも消はてんけふをかぎりの露の身もせめ
て未來ハ佛果のたねヲ、さうじや「のりの手むけのあかの水くま
んと岸にしづ〳〵と立よりたまふに水のおも見ればふしぎやわが
面影うつるまさしく犬のうはもし八ッふさが來りしうど見れども
影も波のおとねんじもいたゞきさしうつす貌ハかハらぬわがふも

かげハテふしぎや初のすがたハ犬のかたち今またじもずをこのこ
とくのざしてうつせばわがおもかげ心の迷ひうそらめかとがてん
もかねばじもずおしかくしうつせば又もおそろしきすがたにぞつ
として珠數をかざせばわがおもかげかくせば犬のかはかたちヨつ
とばかりに聲たて、狂氣のごとくたちつゐつあなたへうろ〳〵こ
なたへ倒れせんど正体なきくづをれあやめもヨかずなげきしがは
てしなければ泣〳〵ものゐる山路ハつるぎにてけづる思ひにやう
〳〵と岩屋の内のこけむしろ木の葉の上に坐をしめて涙にいとど
露ふかき今ハ此世の秋のしもきゆるまちかき玉のおと心ぼそくも
ねんじもわりいとゝあハれをそへんとや妻こふ鹿のこゑよみてこ
だまにひゞく山びこの風ものすごくくれわたる

宗清

君命うけてひねきよが身をかた糸の夜の闇まもれゞ敵も夜あらし
もやたけ心の矢ぴようぶにへたてきびしき板ひさし　詞「ふつたる
雪かな野も山もみな白たへといつかかしらにつもる雪寒さにまけ
ぬ宗清が六はらよりの上意をうけ左馬のかみが枝葉の子どもみつ
けしだいよくびうてと清盛公のきびしきおきてその制札に松をた
をりて松をたすくと内府直もりどの、詞をたまふゝ何ざま心あり
げなぞせうとにもかくにも御守いはなし相手のないのでたいくつ
すいまをさける此兵衛ぢせいよ亂のわすれぬためかのそんかうが
雪あかりどりや友人をひらいて見やうゝ「ふるさとをいでしにま
さる涙ゝな夢にわかるゝ枕といげに定家がよみうたも身にくれ竹

のふし見なるしるべの方をたづねんとしちくをいでゝわとやさき
「あゝ　みならぬゝ道しゞの雪のつるぎにもすそさへくれないさそ
ふてり草の今ゝはかなきときゝのまへいたわしや今若と乙わかぎ
みをれうそでにつゝめとわまるうき事の世ゝ牛わかゝふところに
凍るちぶさをいだきねの說を見るさへいとゞなほ歩みつかれてお
ゝしける　詞「ゝゝさまわぶのふでざり升かならずけがしてくださ
るなや　詞「チゝ今わかよふいふてたもつたしちくの里をいでしよ
り便りに思ふゝそなた計り思ひゞきのふゝむかしにてかゞみが池
に影たのみ三人りの子どもゝもふけても悲運つたなき　源　の此も
くすへ　必　平家のさふらへに見とがめられぬやふにしてたゝやと
かういふうち伏見へもあゝいだゝない二人りともしんぼうしてある

いてたもやといへ也乙かぐ豆ん世なくもうあるくのいいやじや〳〵 詞「アヽこれいまたどうしたもの今にねんねをさすほどに關わけてわるくものじやそれ見やむかふが雪あかりでとゞのなわてや小はたのさと「やがて小はたの山こへて馬いあれどもかちはだし君を思ひゞもくぞとよあるくものにい花もみぢ花の手ぐるま手をひいてあもみかゝれゞ雪風に笠をとられじつくつゑの雪になみだも玉ぼこの道もせをもきなやむ 詞「ヤァ夜中といひあやしい女おさなごを大せいつれ此關をこすきであらふが此所い小はたの關義朝がざんどうせんぎのため宗清どのゝきびしいかためサァありやふになのりてとふれ「サァわらいゝもと都のいちびと伏見のへんへしるべありてたづぬるうちに此大雪二人りの子どもに道はゞもかず思いずも日をくらしたりどうぞ情に此せきを 詞「ヤアそふぬかすはどなはあやしいサァ女めとたちあがれゞ 詞「ヤレさて兩人きけゞ子どもをつれた女となゝ源氏のよるいよにあいのちうもん身がぢき〳〵にたゝしてくれうなにゝしあんの宗清がこふるあしだにせんあくの邪正の道をふみわけて關のとぼそのにいづたへ 詞「いやしからざる上ろうともをもつれず只一人り見れゞおさなき子どもをつれハテあでやかな「きつとながめていたりしが 詞「コリヤ女よく聞よ今去かいやうやくおだやかなるもせんだつて古びたるさまのかみ義朝大せいの子どもあつて所々はうゞにひようはくなしてとに五條のぞうしときが腹に三人の男子あるよしいけおいてい餘日のため見つけしだい首うてとあらたにたて

し此關所此宗潛がかんりきに一トゆ見たればのがれいない常盤なりと白せういたせ「やうすといれてふさがるむね　詞「エヽそんなちァノ三人の子どもがある㋐へサァそのうたがひも子ども㋐へ子のある女子いいつくにも　詞「アヽいわれなそのいへぬけ子どもの事いさていいていわずとしれたふようのまなじり國色のきこへある常盤でせんはかにあらふはづがない身がひつたてヽ福はらどのへ　詞「アノすりやどうあつてもゆんに思ひバ此身のぬれぎぬせひもなき世のありさまじやナアコリヤものども大じの落人關所のにれへサァ女めたとふせひなくくもあらしこにひつたてられでときいでせん」「すきまもあらバおちあちのたつきもしらぬ關のにいずくにはなれたるうぐひそのふゝきにせよふふせいなり

關の戸下

こよひもすでにふりしきる雪のつばさのはかせをも昔しづかにや更てもくまさに先帝おんなきあとをとひたてまつる後夜のどくきやうなはも回香をわそれもやらずじ㋐するもおとヽ安貞と応ばかりの手むけ草宗貞袖をとりいたしァヽさりながら血汐にそみし此かたそで身にそへはべれバ先帝へのおそれありいかゝいせんとわたりを見まいしヲヽそれよくくとくだんの片袖ことの下へおしかくすそのまに奥のひとまより一ばいきげんで關もりいてうしさかづきたづさへて足もひよろくわ㋐みいでエィ世の中に酒ほどのたのしみいないわいのヤァ此花よめどいどこへいつたヘヽアきやつとこいそきたなエヽいそぐやつさコレお前もいつてねなよねね

いそんだばさらんだあれいさのエイてれいさのエイやと戀のふち
もしもはまるぎて四ッもみぢなるほどわしいいつてねやうかそな
たいきついろひよふじやア、わぶない〳〵といへさまいれるふ
ところの手さきを押へて「ア、コリやなにをするおれがふところ
へ手をいれてド、どうするのだ」「サアこれい「イヤどうするのだよ
エきこへた〳〵かみがないといふことか神もまつしやも打つれて
めでた〳〵のわか松さまよ枝もさかへて葉もしげるおめでたや千
よのこおめでたやせんしうばんせいたん〳〵〳〵せいア、いざる
せたまいとおしやられ去ゞうを胸に宗貞い心のこして奥へいるあ
とい手じやくの一人り酒ア、さぞ今ごろいしげれ松山エイアろい
きみだそコリヤ命をかきむしるヨいどれもふ一ばい酒にうつろう

星のかげ　詞　此はい中にちんせいのひらく影い寅の一天今月今宵
三百年にあまる此さくらをきりてこま木となしはんそく太子のつ
かの神をまつる時い大ぐいんじやうじ心のまゝ此おのをもつてた
ち所に「かしこの石におのの刀をおしあて〳〵とぎたつる音いそ
う〳〵とう〳〵とやみをてらせるてんじきい玉ちる計りものすご
き此斧のはを心とむるい幸いなる此琴とたちあがつてをのふりあ
げ二ッよきればコハいかに内よりいづる血しほのかたそで手にと
り上れば〳〵いちうに深くひめおく官合のいんじもいおのれとと
びさりてめいどうするぞふしぎなるハテ心得ぬ此かたそで手にと
れば〳〵がくわい中のかんがうの印さくらの梢にとびさりしがいよ
〳〵あやしき此さくら木何にもせよと立あがりきらんととすれば

目もくらみおやへずあとへだちく〳〵去たし心もきへ〳〵と
髪にすがりてぼうせんたり「まばろしか深雪につもる櫻うげに朝
にいくもとなりもふべにい又雨となるふさんのむかしまのあたり
墨染がたちすがたあだしあだなる名にこそたてれ花のつぼみのい
とけなきかむろだちからくるわのさとへねでしてうへて春ごとに
さかりのいろを山風がきていねよとの兼言もとせりさだめぬうた
かたの水にちりしくながれのみ「もくもかへるも忍ぶのみだれか
ぎり去らしぬ夏が思ひ月夜もやみも此里へしのびつきんでかうし
さきもきつもどりつ立つくすむかふへてらすてうちんの紋い蒲蝶
てうとよい首尾とおもひやり手が見るめまつたぞやチ、よふきな
んしたあいたかつたもめでしらせのれんくゞりている跡を殘かし

げにさしのぞきさてまたせるぞ〳〵と一人りつぶやくはゆもなく
まがきの内より小手まねぎふわときせたる打かけの裾にかくれて
ながろうがどく蛇の口をのがれしてゝちはつとひといきつく鐘も
ひけ四ッまでに床の上又あたゝまりのさめぬのいさつきにかへつ
た客でもよもやあるまいうコリヤ外にできたわへどこのといつか
去らねどもお年が夏かふてよい男でお金もたんと沙所持なされた
いろ男さまと去つぼりとおちぎりなされたでござりませうのエ、
はらのたつ「まれ此やうに初めから起証せいしを取かわし深いお
方がありながらかくしておいて又夏しにいろであふとゝよふも
〳〵だまさんしたがにくらしいそふとも去らず去たいきて見れば
はかなさや片袖血汐のもヒいなきあとのかきみと思ばいとゝなは

コレなつかしいかなしいとことばにいろはふくめども心のつるぎにわられたちよる女をはつたとねめつけ

長歌の部

わか菜

君にゝかなをすゝむる事寛平延喜のみよにはじまり天暦四年ささちぎにもにようぞやすこのたてまつるなかにかづそふ十二種のいろくらぶなるわかな人いくちよもうわらぬためしいもとせのむつみなつみて春日野のわかむらさきの戀ごろも去のふのみだれかぎりなくふかき思ひをつゝうつり心と初めからうき水ぐきの筆つばな心ねせりにたちわかしまつよかいなきいつゝりのあふひとのよすがさへなづなうらみてかた山きゞすなくねにもるさわらびの露にはころぶふせゐなり

花見おどり

吾妻路を都の春に去が山の花見小袖のぬひはくもたてをかまわぬたてぞめやよき事菊の判じものおもひ〳〵の出たちばへつれて見つれてもく袖もたんだふれ〳〵六尺そでの去かも鹿の子のおかざきじ女郎し裾に八ッはしそめても見たがそさまむらさきいろもていヤンレそれいそふじやイナ手さきそろへてざゞんざのおとといはま松よんやサ花月いどれが都のながめやちかつぎまぶかに北さがおむろ二でう通りのむかでやが去んきこらした去んくの紐を袖へとふしてなげやさくらひんだゞのこの小袖まく目にもわやわるに

小袖の主の顔を見たなら猫よりろヤンレそれいへ花見するとてく
まがへがさよのひもくまがへひさしでござれ月にうさぎい和田さ
かもりのくろいさかづきも嬉し腰にひようたん毛きんちやくよふ
ておどるがヨイ〳〵よいやさ

勸進帳

旅の衣いすゝけゆ露けきそでや去はるらん時しもころいきさぎ
の〳〵十日のよ月の都をたちいでゝこれやこのもくもかへも別れ
てい去るも去らぬも大坂の山のくすかすみぞ春いもかしけれ波路
はるかにもく舟のうみつの浦につきにけりいざとふらんと旅ごろ
も開のこなたに立かゝるそれ山伏といつぱゐんのうゞそくの行義
をうけ即去んそくぶのはんだいをこゝにて打とめたまいん事めう

わうのせうらんはかりがとふくまのでんげんのでむつわたらん事
たちどころにおいてうたがひあるべからずあびらんけんと珠數
さら〳〵とおしもんだりもとよりくいんヒん帳のあれゞこそおひ
の内より往來のまきもの一巻とりいだしくいんじてうと名づけつ
ゝたからかにこそよみあげれ天もひゞけとよみ上たりゐんじてぞ
みへにける士卒がはこぶひろだいに去らあやはかま一トかさねか
ゝぎぬあまたとりそろへでせんへこそいなはしけれこいうれしや
と山伏も去づ〳〵立てあゆまれけりすいや我君あやしむるい一で
のふちんこゝなりとおの〳〵あとへ立かへる金がう杖をおつとつ
てさんゞにてうちやくす通れとこそいのゝしりぬかた〳〵い何も
へにかはどいやしきがうりきをたちかたなをぬきたまふい目だれ

顔のがふるまいおくひようのいたりかしと皆山伏いうちかたなぬきのけていさみかゝれるありさまいいかなるてんまおにかみもおそれつべうそ見へにける士本をひきつれ關守い門のうちへぞ入りにけるついになかぬ弁けいも一ごのなみだぞ去もせうなるはうがんおん手をとりたまひよろひにそへしそでまくらかたしくひまも波の上或時い舟に浮び風波に身をまうせ又ある時い山せきのぼていもみへぬ雪の中に海すこしあり也ふ波の立くるおとやすまあかしとかくみとせのほどもなくゝいたわしやとしはれかゝりしかにあざみ霜につもおくばかりなり

さぎ娘

もうじうの雲はれやらぬ雪の夜のこのもかのもに花やさくたれにこがれて松風のふけども枝に雪もちてつもる思ひいあわ雪の消てぬれにし戀ごろもせめてあわれと夕ぐれにちらゝ雪にぬれ鷺の去よんがりとかゝもらし迷ふ心のほそながれ行名いづくと去らさきのいつかはれなん胸の月すまの浦べで汐くむよりも君の心がこりにくいさりとい實にまことゝ思いんせ去やほんに咲でかひなきやよいの櫻花を見すてゝアレ歸る鴈多もやらねどとひくるつゞめこぞのちぎりをわすれぬしよんがへそれが戀ぢのわけじやもの恐ぶそのよのはなしをすてゝ緣をむすぶり神さんも初手いうらみてついひぞりごとゝかぬ思ひかつらぎのくめの岩はし中たへて枕にちりのつもる夜をかぞへてないてまちあかすいその千鳥じやないかいなあのあだ波のうき名たつほんに涙のつらゝさへとけても

ふせの嬉しさにおせるいろかのはずかしやひなのまつりの箱入り
にんぎやうさやゝちりめんきんらんどんすふとんかさねて去やん
どのりものにうちのせて行列そろへて見ごとにさいざんでさ見事
にそろふた花の山雲かあらぬゝかすみのそでに色もうつろふ八重
山ざくら去つ心なき春風にちるいの〳〵ちりくるい〳〵ちる花い
ふゞきなびくいしなよき柳ごしひようしうき〳〵五人ばやしがは
やしたかいもちしさのおさなあそびへ花となまめく去ろたへの雪
のふりそでおのが羽風にひら〳〵〳〵すがた見まがう柳うげ

外記ざる

まゝりいでたるそれがしいずんと氣かるなふうが者ひがな一日小
猿をせなにせをいかゝげてすがたにようやなんなげつきん夜さ
のとまりいどこかとまりぞなはか名おしいむろがとまりぞ〳〵泊
りをいそぐ後ろより小ざるまいせやさるまわしヲゝイ〳〵どまね
かれてたちかへりたる半丁あまりげんくわんかまいし門のうち女
中こともしゆとり〳〵にしよもう〳〵のことばのした猿の小まひ
を初めけりやうめてたや〳〵ナ君がよわひはてうせいでんのふろ
うもんの名うてときゝ少將の雨のふるよも雪の日もかよひ〳〵
て大磯や里のしよわけのほたされやすくたれにひと筆かりのつて
やぼなくぜつをかへすがきすいなてくだについのせられてういき
な酒に宵の月たれてよかろかはれぬがよいかとかくかすむが春の
くせいてヲゝそれよわれもまたいつかはらさん父のわだ十八年の
天つ風今ふきかへすぬんりきにのがさじやらじとゆうもうけつき

そのありさまはぼたんくわにつばさひらめく小蝶のごとくいさましくもまたけなげなりやぶの鶯きまゝにないてうらやましさの庭の梅あれろよ〳〵とうきなたゝせにふきおくるつゝみのすみれさぎろうは露のなさけにぬれたどしいろと戀との實くらべ實ういた伸の丁よしやよしあうゆうぶろうのいさおしいあら人神と末の代もおそれあがめてあとしまた花のお江戸の淺草にかいてうあるぞにぎわしき

娘道成寺

いわずかたらぬわが心みだれし髪のみだるゝもついないはたゞうつりぎなどふでも男いわくせうものさくら〳〵とうたわれていふて鉄のわけ二ッつとめさへたゞうか〳〵とどうても女子いわくせうもの都そだちいはすはなものじやへ戀のわけ里ぶしもだうぐをふせあみがさてはりといきちの吉原花のみやこいうたてやわらぐしきしまばらにつとめする身いたれとふし見のすみぞめぼんのうぼたいのしゆもく町からなにいよすちにかよひきつちにかむろ立から室のはやざきそれがはんにいろじや一イ二ウ三イ四ウよつゆ雪の日下のせきちもともに此身をなじみかさねて中いまる山たゞまるかれと思ひろめたがゑんじやエ梅とさん〳〵さくらいいづれ兄やらおとゝやらわきていわれぬ花のいろおやめかつきばたいいづれあねやらいもとやらわきていわれぬ花のいろエ西も東もみんなみも花の顔さよを〳〵たれば戀ぞますへさよをへかわゆらしさの花娘こいの手ならひつい見ならひてたれに見しよとてべにかね

つきよそみんなぬしへのしんちうだてヲヽうれし〳〵末いからじ
やになそふなるまでいとんといわずにすきそへとせいしさへいつ
わりかうそかまあとかどふもならぬほどヲヽあいにきたふつつり
りんきせまいそとたーなんて見てもなさけなや女子にいなにがな
るとのご〳〵のきがしれぬ〳〵あくせうな〳〵きがしれぬうらみ
〳〵てかこちなきつゆをふくみしさくら花さわらばおちんふぜい
なりおもしろつしきのながめや三國一のふじの山雪かと見れば花
のふゝきかよしの山ちりくる〳〵あらし山朝日に山〳〵見わたせ
ばうたの中山い〜山のすへの松山いつか大山いくのゝ道のとふけ
れば紅ちにかよふあさま山一トよのなさけあり山いなせのあとの
はあすかきそ山まつち山わがみかみ山いのりきた山いなり山緑め

むすびしいも世山二人りが中のとがね山花さくゑいこの〳〵おば
すて山みねの松風おとゝ山入相の鐘をつくば山とうゑい山の月の
かほばせみかさ山

琴歌の部

あけがらす

待くらし、そしてうらみし、ろの夜半ゝ、おそい來やうと、ひとと
がつひいひつのる、中〳〵に、ないてゐるのを、わらふのも、そむけ
たせなか、うちたゝき、男心のにくいのも、うれしいことも、とにか
くに、なみだがさきの、やぼとなる、をなごのくせじや、ないかいな
とにかくに、なみだがさきの、よはいきを、津よう見せてわ、〜なふ

つきよそみんなぬしへのしんちうだてヲヽうれし〳〵末いからじ
やになそふなるまでいとんといわずにすまそへとせいしさへいつ
わりかうそかまあとかどふもならぬほどヲヽあいにきたふつつり
りんきせまいそとたーなんで見てもなさけなや女子にいなにがな
るとのご〳〵のきがしれぬ〳〵あくせうな〳〵きがしれぬうらみ
〳〵てかこちなきつゆをふくみしさくら花さわらばおちんふぜい
なりおもしろつしきのながめや三國一のふじの山雪かと見れば花
のふゝきかよしの山ちりくる〳〵あらし山朝日に山〳〵見わたせ
ばうたの中山い〜山のすへの松山いつか大山いくのゝ道のとふけ
れば恋ちにかよふあさま山一トよのなさけあり山いなせのあとの
ばあすかきそ山まつち山わがみかみ山いのりきた山いなり山緑め

むすびしいもせ山二人りが中のこがね山花さくゑいこの〳〵おば
すて山みねの松風おとい山入相の鐘をつくば山とうゑい山の月の
かほばせみかさ山

琴歌の部

あけがらす

待くらし、そしてうらみし、ろの夜半い、おそい來やうと、ひとと
がつひいひつのる、中〳〵に、ないてゐるのを、わらふのも、そむけ
たせなか、うちたゝき、男心のにくいのも、うれしいことも、とにか
くに、なみだがさきの、やぼとなる、をなごのくせじや、ないかいな
とにかくに、なみだがさきの、よはいきを、津よう見せてわ、ーなふ

たわ、うき河竹の、なかれの身、せめてくめかし、あけがらす、

二百三十六

山櫻

のどかなる、春の心にさそはれて、花の下ひもうちとくる、ちぎりやきのふ、けふはまた、おもいぬかたの、山風の吹にまかする、花のにだ、ろれもうきよの、ならひしやものを、心よいさをとがにして、あだなる花と、ともすればたつなはづかし、やまざくら、

蓬來

このとのは、むべもとみけり、さきくさの、三ッば四ッばの、いつまでも、かはらぬはるの、ひなづるに、色をならぶる、ーらうめの、にほひもこゑも、のどかなる、夏をむねなる、いづみのほとり、ををひく、かめに、うらしまが、むかーがたりの、いとわかくと、つりのてたちの、人がらい、寒ゐにまがふ、おきのかた、あらおもしろの青海波と、酔るがおとく、たもたふて、あゆむともなく、ゆくともなくいたる所は、ほうらいきう、こがねをのべ、玉をして、ことなるたつの、みやゐにも、戀となさけは、めにたつなみの、おとにきこえし、ひめいまだ、いひよるとも、しらぬひのつくしつくせるこゝろのうちを、ろれとさとれど、うちつけに、なんといはまの、うきさがひ、よその見るめも、なかくに、なかだちいらぬ、にひ枕、ぬれぬうちこそ、つもをもいとへ、おもへばふしぎの、にしぞと、なおりいつきぬ、月日貝、かひあるけふの玉手ばこ、たづさへいづれは、悠然となみのつゞみぞ、きこゆなる、えだいふりても、いろかにぬ、松かせい千秋のこゑ、としもやうくれたけの、いくよのふべき、長生

二百三十七

殿、おいせぬかどに、たちかへる、春をかぞふる、さゞれいしの、いはほとなりて、こけのむすまで

長恨歌曲

今はむかし、もろこしに、いろをおもんじたまひたるみかどおはしませしとき、楊家のむすめ、かしこくも、君にめされて、おけくれのおんいつくしみ、あさからず、常にかたばらにはんべりぬみやのうちの、たをやめ、三千のちやうあいも、わが身ひとつの春の花、ちりて色かも、なきたまのありかをたづねみなれざほ、さしてはるゝ行船に、方士いなみの、うきぬする、とこよのくに、來て見れば樓閣玲瓏として、五雲起れりうちになまめくめのわらい、ことにすぐれて、玉眞のすがたは、いつれ、李花はいつ枝、雨を帶たる、ろの氣はひ、見るよりそれと、あとのはも、なんだあぼれて、らんかんを、ひたすもいかに、なれそめし、りさんのむかし、おもひやる、あらなつかしの、みやこ人はづかしながら、ありしよの、そのむつおとも、きにはつる、つゆのちぎりの、うさはらし、いふて見よなら、ひとかたに、おほしめすかや、ふかきにに、春のあほりの、うすきいやよ、おもひあふよは、うゝとけて、ねみだれ髪を、ろのまゝに、とりつくろはぬ、をなおぎを、かわいがらんせからすばの、いろにあの身をそめ糸の、むすびめかたき、かたらひも、にんつきぬれば、いたづらに、またあのしまに、かへりきて、猶なつかしき、いにしへを、おもひいつれば、あれなる、紫破覆裳、羽衣曲、まれにぞかへす、乙女手が、まれにぞ、かへす、そとりあとが、袖うちふりし、あゝろしきや

さるにても、君にい此世、あひ見んとも、よもぎがしまつどり、うきよなれどめ、懇しやむかし、こひしやむかしの、ものがたり、つくさば、月日も、うつりまひの、一るしのかんざし、請りて、みやゐにかへる、家づとは、ふみにも、まさる、文月の、なぬ日のよいの、さらめも、ひよくれん理も、今いはや、かれ〳〵なりし、うきちぎり、天長こーなへなるも、地久、ふりぬるも、つくるときわり、ゐのからみめん〳〵、らう〳〵としてたにまなく、いまにのこせし、筆のあと、

なでしこ

おと花のおほかる野べの春秋をへだて〻今は、中そらや、てるひに匂ふ、からやまと、花のそしきの、とてなつは、げにたぐひなき、よそほひ、くれなゐの、こそもの色に、おきわたす、あしたの露の、玉すだれ、かけてぞいのる、神がきの、しるしなるらす、ひめゆりも、ひもときそめて、なびき去て、むつれ無つる〻、手枕に、かほりのゐして、名いたち花の、かげにやどるか、ほと〻ぎす、あけてわかる〻ちぎりいほんに、すにひさかたの、雪のそで、ひく手もしげき、おやめ草、もによしゐる、ひの葉の、かたりもつきぬ、はゝこぐさ、かれぬさかにを、うつくしうゑて、さかりひさしき、宿の撫子、

義太夫の部

三勝半七酒屋の段

詞「今比い半七様何處にどふしてゞさらふゞ今さら返らぬ事ながらわしといふ者ないならば半兵衛様もお通にめんじ子迄なしたる

三勝殿をとくにも呼入さしやんーたら半七様の身持も直り御勘當も有まいに思へば〳〵此園が去年の秋の煩ひにいつろ死て仕舞ふたら斯した難義ハ出來まいものお氣に入ぬと知ながら未練なわたしが輪邊故添臥ハかなれず共お傍に居たいと辛抱して是迄居たのがお身の仇今の思ひにくらぶれば一年前に此園が死る心が付なんたこらへてたべ半七様わしや此様に思ふて居ると恨つらみは露程も夫を思ふ眞實心猶いやまさる憂思ひ

大功記七段目

詞「是見給へ光秀殿軍の門出にくれ〳〵もお諫申た其時に思ひとまつて給いらば斯した歎ハあるまいにしらぬ事とは云ひながら現在母御を手にかけて殺すといふハ何事ぞせめて母御のご最期に善心に立歸るとたつた一言聞してたべ押むいいのと手を合諫つ泣つ一筋に夫を怨なき操の鏡くもりなき誠に誠あらはせり

千両幟猪名川内の段

詞「角力取を男に持江戸長崎國〳〵へ行しやんすりや其跡の留守ハ猪さら女氣のひとりくよ〳〵物案じ夫に怪我のない能にと祈る神様佛様妙見様へ精心も戻り〳〵やんして顔見る迄案じて夜を寐ぬ女房の今此せつなる苦ーみを連添ふ私に云しやんせぬお前ハそれ程つれないと女夫に成た今迄をかぞへ立〳〵恨誠に時移り

廿四孝四段目

回向せふ迚お姿を繪にハかゝしハせぬ物を魂かへす反魂香名画の力も有ならばかハいいとたつた一言のお聲が聞たい〳〵と繪像の傍

に身を打ふし泣涕こがれ見へ給ふ

八陣八ッ目

ぶじにあつたか替らぬかとたつた一言をつーやつてもふ孝の科によよも成まい其心とい露しらず都でお別申てより勿体ない事ながら父上や母様を思ふ案じい何所へやらあなたの事が苦になつてほんに寐た間も忘かね逢たひ見たひと明暮にあがれしたふて居る者を聞へませぬと娘氣にあとや先なる怨あと

先代萩御殿場

詞「そなたの命い出羽奥州五十四郡の一家中所存の臍を堅めさす騒動の礎ぞやとい云物のかいいやな君の御爲かねてより覺悟い極めて居ながらもせめて人らしい者の手にかゝつても死事か素性賤しい銀兵衛が女房づれの剣にかゝりなぶり殺しを現在に傍に見て居る母が氣いどの様に有ふどふ有ふ思ひ廻せば此程から謳ふた歌に千松が七ッ八ッから金山へ一年待共まだ見へぬ二年待共まだ見へぬと歌の中なる千松は待かひ有て父母に顔をば見せる事も有ふ同じ名の付千松のそなたい百年待たとて千年万年待た迚何の便が有ぞいの三千世界に子を持た親の心い皆一ッ子のかいいさに毒な物喰なといふて呵るのに毒と見たら試て死てくれいといふよふなどふよく非道な母親が又と一人ある物か武士の胤に生れたい果報か因果かいちらーや死るを忠義といふ事いいつの世からの習いしぞとおりかたまりし鉄石心遏女の愚にかへり人目なけれいふし轉び死骸にひつゝといたき付前後不覺に歎きしいことといりすぎて

道理なり

玉藻前三段目

詞「委細の樣子ゝさつきにから殘らず聞て居ましたねぐらはなれし時鳥子で子にあらぬ自を此歳月の御養育まだ其上に妹迄自を助んと樣々の心遣ひ思ひ廻せば廻す程空恐しい身の冥加胸にせまつて一言もお禮ゝ口へゝ出ぬわいなこんな憂めを見せまする皆自が徒から迚も叶ぬ戀故と覺悟極めて居りました露ちり御恩を送りもせず先立まする不孝の罪お免なされて下さりませ產の父上母樣ゝ何所にどふしてござるやら命の際に只一目逢て死たい顏見たい是斗りがといひさせ聲くもらせば初花姫のふ曲もない其おとば譬へ何れの胤なり共わらゝの爲にゝ大事の姉御お前ゝ殺さぬ自をイヤのふろもじいながらへて便すくない母上へおみや仕へを賴むぞやイヤ自をいやわらゝと死を爭ひしをとゞひの心根ふびんと母親ゝ何れを是と別兼る胸ゝ涙の三ッ瀬川身も浮斗歎が

白石斷新吉原の段

詞「思ひ返せば十二年そなたゝ五ッ子顏さへ見知ずとゝ樣の御最期や母樣の死目にも逢ぬといふ悲しい不孝なはかない事が有ふかいの斯した事とゝ露ーらず此妹ゝ健なか知ぬとゝ樣かゝ樣お煩ひても有ふならよもやしらしてたもふ物便のないをつへ柱首尾よふ年を勤たら國へ歸つてお二人に樂させましてどふしてと悲やうゝ氣を嗜んで勤大事といひ號の服御の事もそなたの事も戀しなつかし思ふのをたのしみ暮したかひもなふ名乘逢たゝ嬉しいが悲しい

はなし聞姉が心も推してたもいのと手を取かいす兄弟が涙〳〵を
立聞も貰ひ泣〳〵て立わけの暖簾もぬるゝ斗こ

鎌倉三代記三浦別の段

イヤ〳〵〳〵是か泣ずに居られふか討死の門出にい忍びの緒を切
と聞殊更兜に名香のかほるい兼ての御物語思ひ切た最期のお覺悟
わたしもお前につれ添からい何の未練にとめやせぬ〳〵なせ白地
に打明て此世の縁い是限り未來て夫婦になつてやろと一言いふて
い下さんせぬやつはり敵の娘じやと疑ふてかいの聞へませぬ父上
の事は打忘れ日本國に親といふい奥におざる母様より外にいない
と思ふて居るにあんまり氣づよい三浦様お前を先立跡にのめ〳〵
生て居る時姫じやと思ふてかいのと身をふるいしつもり〳〵てう
さつらさ鎧の膝に夕立の涙汲出を如くこ

同

今宵一夜い夜伽遊ばし同じ事なら御臨終の跡て死て下さんせとい
ふも泣々義村も父母に請たる身祥膚腑死目に逢て別るゝかと行つ
戻りつとつ置つ又もやせきの聲すれば是ぞ聲の聞納めと思へい
よいる後髪せめて暫しは余所ながら万分一の恩報じ御藥なりと温
めんと心の内にくる珠數の涙しのびのおのづから短夜

安立ケ原三段目

罰も慮外も顧ずおねがひ申奉る今の浮身の耻しさ父上や母様のお
氣に背きし報ひにて二世の夫にも引わかれ泣潰したるめなー島二
人が中のコレ此お若とて明て漸十一の子を持てしる親の恩しらぬ

眼父様ばゝなをしたふ此子がいちらしさ不便とおぼしあれと跡
飄ひさしせき入娘

日吉丸三段目

とゝ云ながら情ない過しあふ夜の睦言を身にしみ〳〵と片時も思
ひ忘るゝ隙もなふ年月隔つ其中に移りやすきゝ殿御の心もしや見
捨ゝなされぬかとほんにあらゆる神様や佛様迄無理云て案じ暮し
た甲斐もなふ添れぬ義理の離別とゝあんまりむおいと取付て涙先
立くどき云

お染久松買店の段

詞「ソリヤ曲かない胴欲な高いひ低いひ姫おぜの肌ふれるのゝ只
一人親兄弟もふり捨て殿御につくが世の教ろれにまだ〳〵悲しき

ゝ夕昨の風呂の揚場で此腹帯をかゝ様が見付さんしてコリヤお染
此腹帯ゝ何事ぞとうから様子知た故度々のこゝ異見節御の耳に入
まいと辛抱ーたがもふ叶ゝぬ情ない事ーてくれたと泣しみついて
のお腹立ろなたに案じさすまいと今迄こふと岩田帯隠て居たがこ
んな身でどふ嫁入がなる物そ一所に殺してたもいのと膝に打伏し
やくり泣

管原寺子屋のだん

御臺若君諸共にしやくり上たる御涙迷迷の旅へ寺入の師匠ゝ彌陀
佛釋迦牟尼佛六道能化の弟子に成賽の河原で砂手本いろは書子を
あへなくもちりぬる命ぜひもなやあすの夜誰か添乳せんらむうゐ
ゆ見る親心劔と死出の山けあへあさき夢見し心地して跡ゝ門火に

そひもせず京い古郷と立別れとり逢のさして連歸る

お駒才三白木屋の段

詞「そりや聞へませぬ才三様お前とわたしが其中いきのふけふの事かいな屋敷に勤た其内にふつと見そめてはづかしい戀のいろはをたもとからろつとわたしが心でい天神様へ願かけて梅を一生たつたそへ其お影やら嬉しい返事二世も三世も元の世かけてちかい中じやないかいな今宵の事を報せまし閒談合も仕様物を待かねて居るものをあんまりむおいあいそつかし叩いて腹がゐるならバ心任せにした上でもふかんにんをしてやるといふてたんのふさせてたべと男の膝にすがり付よろを憚る忍び泣見へていちらしし

彦山權現六助住家の段

そのい取分悲しさをやるせ涙のくどき事ほんに浮世と云ながら身に憂事のかく斗重る物か父上の敵を願ふ門出に可愛や弟い盲目の儘ならぬ身をくやみ死跡に見捨て古郷を出もちりぐはなれぐ在家をさがす其内に悲しや妹も劒のなん父上のみかろもやそも二人三人がおちきない刃の露ときへ殘る母と私が憂苦勞つらい悲しいはづかしいなりもかたちもいとひなく雨露雪の深山ぢや野ずへにあるゝ一ッ家にもしや隱れてゐよふかと人なき道に日をくらしさまよひありて親と子が便りない身のうへもなき便りの人にめぐり逢私か心の奥底を明すい二世の我夫必見捨て下さんすな可愛と思ふて給いれとくどき歎きて伏しづむ

小はる治兵衛紙屋の段

詞「憎ましやんすが嘘かいなおとゝ志の十月中の亥の子に火燈もけた祝儀迎コレ爰で枕並べて此方い女房の懐には鬼が住か蛇がろれ程心殘りなら泣しやんせ〳〵其涙か蜆川へ流れたら小春か汲で呑みやろぞ餘りむごい治兵衛様何ぼお前にどの様なせつない義理が有とても二人の子供いあなさん何共ないかいなと心の限りくどき立恨歎くぞ誠なる

岸姫松三段目

初い憎やと思ひ〜かつい其人がいとしう成爺様の下さんした來國光の守り刀ふち頭いもみじ流し目貫は金の唐子相撲又あふ迄の筐にと渡せい先にも其時に素袍の片袖押切て所を問ばアノ鎌倉と後はお立で騒ぎ立名を聞暇も波の船甲斐なき戀路と思へ共忘れがたなくなつかしく此順禮を幸に鎌倉を見せていのといふたももしや戀人にめぐり逢んを力ぐさ道の間も其人に添心ぞと樂しみに肌を放さぬ筐の衣是見たまへと身に添し風ろ敷包とく〳〵と明て見せたる素袍の片袖

お俊傳兵衛堀川の段

そりや聞へませぬ傳兵衛様お詞無理とは思はねどそも逢かゝる始より末の末迄いひかはし互ひに胸を明しあひ何の遠慮も内證の世話〜られても恩にきぬほんの女夫と思ふ物大事の〳〵夫の難義命の際にふり於て女の道が立物か不幸とも悪人共思ひあきらめコレ申一所に死して下さんせと隠せ〜刺刀取出す

摂州合邦内の段

嘘か〳〵と箸持てくゝめる樣な母の慈悲おもはゆげなる玉手御前
母樣のお詞なれどいかなる過去の因縁やら俊德樣の御事は寐た間
も忘れず戀こがれ思ひ餘つて打付にいふても親子の道を立難面返
事堅い程猶いやまさる戀の淵いつと沈まばどこ迄もと後をしたふ
て歩はだしあしのろら〳〵難波がた身を尽したる心根を不便と思
ふて俱とに俊德樣の行衛を尋女夫にして下さんすが親のおじひと
手を合せ奉迫れば母親も今更慊れ我子の顔たゞ打守る斗なり

梅川忠兵衛新口村

夫ゝ嬉しうおざんせふ去ながら私がとゝ樣かゝ樣は京の六條の珠
數屋町定めて此間詮義に合ふてゐさんせふかゝ樣ゝ目まい持若も
の事ゝ有まいかと我身の上より案じられ今一度京の二親に一目逢
ふて死たふぐさんすヲゝ道理じやく〳〵わしもろうなの親達に聟じや
と云て逢もした〳〵恩の有養子親妙閑樣や云號のおすゝへもふ埒の
わびろなたの兄忠兵衛殿の志しもむにした所今一度〳〵逢も
したいと人目なければ泣じやくり私もたんと愚のある兄樣ゝ猶戀
しいと互に手を取いだき合涙のあられはら〳〵と袖に余りてまど
を打

お駒才三鈴ケ森の段

思ふて折々問音催念頃にして上まゝて詞エまだ其上氣に掛るゝ私
か死た跡にても彼お人が爰へ來て淺ましい形を見やゝーやんーたら
ひよつとあいろが盡ふかとわしや夫斗が悲しいと今死る身の今迄
もおぼこ娘のあどなさを思ひやりつゝ二親ゝ前後正体打倒れせき

上〳〵呼び泣音い演邊に打寄る涙に涙増涙ゝ

蝶花形小坂部館の段

歌い姉いせき上〳〵孫子の爲にお命を捨く慮の父の恩船車にも積れふかそれ斗かいいと一子をぎ理の刃に殺すのが悲しうのふて何とせふこらへてたもと妹に手を合したる詫涙アノ姉様の勿躰ない斯成行も先の世の約束事と諦てもおんなゆゝしい子を殺す其日もかへす父上迄同じ刃の憂別れ神も佛もなき世かと手を取かいし姉妹が返らぬ悔宗貞も加藤が手前耻らいて笑にとだにも得も云ぬ胸の苦ーさ目に余る涙見せじとくひしばる心をさつし正清もたもち兼たる倶涙異い泣寄異實の涙ゝに暮近き秋や真を添ぬらん

お染久松野崎村の段

そなたは思ひ切氣でもわしやなんぼうても得切ぬ余り逢たさなつかしさ勿体ない事ながら觀音様をかこ付て逢に北やら南やらしらぬ在所も厭いいせぬ二人いつしよに添ならば飯も焚たり織つむぎどんな貧しい暮しでもわしや嬉ーいと思ふ物女の道に背けとい聞へぬいいのどうよくと恨のたけをゆふぜんの振の袂に時雨晴間はさらになかりけり

三十三間堂平太郎住家の段

和歌の浦には名所がおざる一に權現二に玉津島三に下り松四に鹽釜よヨイ〳〵ヨイトナむざんなるかな雅き者は母の柳を都へ送る元は熊野の柳の露にそだて上たる其縁子かヨイ〳〵ヨイトナ

朝顔宿屋の段

又も都を迷ひ出いつかは廻り逢坂の關路を後に逢紅路や美濃尾張
さへ定なく戀し〳〵に目を位潰し物のあいろも水どりの陸にさま
ふ悲しさはいつの世いか成報ひにて重〳〵の歎の數おはれみ給
へと計にて聲を〳〵のひて歎ける

二月六十

版權登錄

明治二十六年七月廿　日印刷
明治二十六年七月廿五　日發行

壹價九錢

發行者　愛知縣名古屋市玉屋町六十九番戸　木田吉太郎
印刷者　名古屋市針屋町三十一番戸　長谷川泰次郎
發行所　名古屋市本町通六丁目　東雲堂
發行所　東京日本橋區通四丁目　東雲堂
發行所　大坂南久寶寺町四丁目　東雲堂

版權所有

粋人之朋友●別嬪之情夫

きはらし

全一冊●頗美本紙數三百ページ
安價金七錢五厘郵送料二錢

此書は當世流行歌○古今はやり歌○どゞ一○はうた○もんく入どゞ一○月琴譜○大つゑ○さわり○かみうた○長うた○江戸歌○ちやりまい○きよ元○ぶんご○とつちりとん○いよぶし○もゝまね○われ、やしやんせ○おいわけ○りきうぶし○じんく○きや、ぶし○鎌倉ぶし○祝小うたい○川柳○にわか○れとし噺○手品○地口○なぞかけ○さいもん○わはだら○しんない○軍歌○狂詩○今様○御座附○はうた、歌　諸國流行歌○淨瑠璃○大津繪かへ歌○ないものづく○方言考○みそめたる女にお
くる文○手堅き女をくど、文○娼妓よりおくる文○藝者にはれられる法○金をためる法○盗難除法○不老不病不死の法○生涯しはのよらぬ法○安わかり味まい馳走をする法○其他皆奇妙奇的烈妙不思議な事や愉快な意氣な歌等は漏れなく書きあつめたる今猶歩の珍書なり

きはらし二篇

全一冊　實價　八錢
郵送料二錢

○はらわ○都々逸○清元○をはなし○縁かいなし○當世流行歌○新内○義太夫　落ばなし○珍事奇聞○狂句○大津繪ぶし○呵で〻○漢でも○秘事まつげしなぞがけ○すもうじんく○丹彼宮津節○情歌○滑稽○はたらきやう○偏らず口○米山じん○有理もつとも○隠語盡くし○ふみ○一口ばなし○變歌三十六歌撰其外いろく

滿月居嫦娥編

類題　發句一萬集

全二冊
紙數五百頁
正價二十錢
郵税四錢

本書初篇には春秋之部を集め後篇には秋冬の部を集む編中皆秀逸の名句なり

粋な浮世

全一冊　紙數三百ページ

減價八錢　郵税二錢

（目次）キンライ節○ナエヤ甚句○ナツペケペ節○スイリヤウ節○こうた○大津繪○都々逸○米山甚句○清樂○清元○一中節○常盤津○長歌○琴歌○義太夫○新内○二上り新内○追分節○鎌倉ぶし○宮津節○仙臺節○伊豫節○立山節○ほれ見やしやんせ○阿房陀羅○祝小謠○祭文等○面白さものゝみを撰みたる珍書なり

●紙數三百ページ余
●實價八錢
●郵送料二錢

きけんよし

全一冊

（目次）滑稽落語●一口話●珍事奇聞○新体詩歌●運動歌●各國人の氣象●善行報●四季今様●狂句●狂歌●笑林戯苑●いろは歌●都々一●はうた●新内●新内二上り●清元●大津繪●義太夫●地口●もつとも〳〵●物語●ふみ●其他いろ〳〵あり

TōWUNDō
東興堂發兌